

「待ち望む」

使徒言行録 1 章 12～16 節

今月の聖書箇所、とりわけ 12 節から 14 節はわずか 3 節ながら内容的に大切なことが詰まっている箇所です。それは、それに続く 15 節の「マティアの選出」、つまり 12 弟子のひとりであったユダの自殺によって、穴が空いた使徒の任務に誰を充てるのかという、重要な出来事の前に置かれた「橋渡し」のような箇所がここです。音楽でいえば、交響曲の「前奏曲」とでも言えるでしょうか。教会においては、はるかに華やかな脚光を浴び、記憶に残る出来事は、断然、マティアが 12 弟子に加わった出来事の方でしょう。それに比べて、この箇所は極めて「地味」な位置しか与えられて来ませんでした。

ところが、このわずか 3 節で述べられている「複数の人々が、心一つにして、約束のものを待ち望む」、つまり「約束を待ち望む」は、クリスマスを待つアドヴェントにも通ずるばかりか、私たちの信仰の重要な一面を指し示すものです。15 節は、「そのころ、ペトロは兄弟達の中に立って言った」から始まりますが、それは 14 節の「人々が心を合わせ、熱心に祈っていた」その延長線に起こった事でした。そして、そこからマティアを選んで欠けていた使徒の働きを補充し、力強いペンテコステの出来事が続きます。目立たず、脚光も浴びて来なかった 12 節から 14 節の出来事に、教会の誕生とその使命である伝道の働きの広がり「種」があったのでした。

使徒言行録の著者ルカは、「待ち望む」というテーマをイエス誕生の物語に散りばめています。ルカによる福音書には、多くの人々がイエスの誕生を待っていたことが記されています。イエスの父ヨセフと母マリアは当然のこと、マリアの従姉妹で洗礼者ヨハネの母エリザベトはその夫ザカリヤと共に、自分たちの子供の誕生にも増して、イエスの誕生を喜びの中で待っていました。マリアは天使ガブリエルから、神の子を身ごもるであろうと告知され、従姉妹のエリザベトに会いにゆくためユダの町に出かけました。マリアが到来の挨拶をすると、エリザベトは来るべき神の子の誕生を喜び、またお腹にいたヨハネも喜んで「動いた」とあります。夫のザカリヤは、まだ生まれていない自分の子供について「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、主の民に罪の赦しによる救いを知らせるからである」との預言を与えられます。ザカリヤにとって、イエスの誕生を待つことは、そのまま神が自分の子供に与えようとしている働きを待つことでもありました。

ルカによる福音書は、親族以外からもイエスの誕生を待つ人々が登場します。イエスが生まれた夜、夜通し羊の晩をして野宿していた羊飼いたちは、天使から「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそメシアである。」というお告げを聞き、マリアとヨセフ、乳飲み子のイエスに会うことを期待しながら、仕事着のままただちに出かけました。老人シメオンは、

両親によって初めて赤ん坊のイエスがエルサレムの神殿に連れてこられた時、そのイエスを見、自ら腕に抱いて「主よ、今こそあなたは、お言葉通りこの僕を安らかに去らせて下さいます。」と神をたたえます。「イスラエルに慰めを与える」救い主の誕生を、生涯待ち望み続けて生きていたのであり、それまでは「決して自分は死なない」と信仰にあつて確信していました。女預言者アンナは、神殿を離れず、断食をし、祈りしながら、夜も昼も神に仕えて、エルサレムの救いを待っていました。そしてシメオンと同じように幼子イエスを見た時に、その喜びを救い主の誕生を待ち望んでいる人々皆に話しました。エリザベトとその夫ザカリヤ、野宿の羊飼ひ、シメオンとアンナ。皆それぞれの人生の中で、救い主イエスの誕生を待ちながら、生きてきた人たちでした。使徒言行録の著者ルカは、このような人々を自らの福音書にふんだんに登場させました。そしていみじくも、今月の聖書箇所が登場してくる人たち、そして使徒言行録に記されている初代のキリスト教会もまた、「待ち望みながら生きた」のでした。

復活のイエスは弟子たちと行動を共にしていた時に次のように命じました。「エルサレムを離れず、父の約束されたものを待ちなさい。」天に上げられる間際には、「あなた方の上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」と言いました。そのイエスの姿が見えなくなるまで、上げられた方向を見つめていた弟子達を現実に戻したのは、「白い服を着た二人の人」とある天使たちのこの言葉、「なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有り様で、またおいでになる。」でした。

この「また、おいでになる」は、「おいでになるだろう」、「おいでになるかもしれない」という「こちら側の希望や願望」や、将来についての「希望的な観測」ではありません。この表現に用いられている元の言葉を見ますと、そこには「神の約束や預言、神の権威によって語られる、確実に断定的な言い方」をする時の書き方と説明があります。つまり、「また来てくれるとよいのに」と言うような、人間の希望の投影ではなく、神が約束して下さった確実なこととして「必ず、再び来る」という、確信に満ちた大変強い言い方です。弟子たちは、天使のこの言葉を確かなものと信じ、イエスの命じた通りエルサレムに戻って行きました。いつか「必ず、きっと来る」イエスが、「聖霊が降ると、力を受けて、エルサレムを始め、ユダヤとサマリヤの全土、また、地の果てに至るまで、証人となる」と約束されたその時を待つために、エルサレムに戻っていった。このイエスの約束と天使の言葉だけを信じ、その言葉だけを携えてエルサレムに帰って行きました。それに続くのが今月の聖書の箇所です。

弟子たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来ました。その山は「安息日に歩く事が許される距離のところにあつた」とありますから、恐らくイエスが天に上げられた場所から、一キロ弱のところに戻って来たこととなります。弟子たちにとって、エルサレムは思い出すことさえ辛い、過去の傷に満ちた町でした。エルサレムはパレスチナ地方の首都でしたが、そこで自分たちの先生イエスは裁判にかけられ、人々の軽蔑と憎しみの渦の中、「国家に反逆し、自らをユダヤ人の王と名乗った」として十字架にかけられ、処刑されました。イエスを殺そうとしていた律法学者や祭司長ら宗教指導者から扇動され、買収された人々が、自分の利益のために出て来た人々が、イエスについ

て悪意と偽りに満ちたデマと嘘を証言する中、弟子たちは身元がばれないように群集の中に姿を隠し、息を潜めて成り行きを見ていたのも、このエルサレムでした。イエスが十字架につけられた時には、出来る限りそこから遠くに居り、同胞のユダヤ人の目を恐れて、自宅の内側から鍵をかけて引きこもっていた。そのために、イエスの遺体の引き取りにも出かけなかったのも、このエルサレムにおいてでした。

弟子たちにとってのエルサレムは、希望が砕かれ、挫折し、無力感と脱力感にひしがれた場所であり、身の安全を守るため、ひたすら自分の中に閉じこもっていた場所であり、イエスを見捨て、イエスから遠く離れ、イエスを中心にして結びついていたはずの仲間同士の絆は切れて、バラバラになっていた場所がエルサレムでした

そのようなエルサレムに帰り、そこで「待つように」とイエスに言われて、弟子たちは言葉通り帰って行きました。しかし、選択肢もそれしかなかったかもしれません。その時、弟子たちはまだ「キリスト教信者」ではなく、「キリスト教会」も誕生していませんでした。依然として、世間の慣わしや宗教的な習慣であるユダヤ教の枠内にいました。戻って来た場所もエルサレム市内で「泊まっていた家」で、過去に痛々しい思い出があったにせよ、ユダヤ人として「エルサレムに行き、滞在する」こと。それはそれほど突飛なこととは思えません。

しかし、たとえそうであったにしても、弟子たちは以前の弟子たちではありません。そのような者たちとして、ユダヤ教社会とその伝統の中心地に戻って来ました。希望に支えられて、忌まわしい記憶が残るエルサレムへ戻っています。その希望とは、時が来ればイエスは「再び必ず、きっと来る」というそれであり、そのイエスが約束したように「聖霊が降ると、力を受けて、地の果てに至るまで、イエスの証人となる」日が来るという希望でした。将来に向かって開いている、まったく新しい事柄、希望。それも、弟子たちの願望というレベルを超えた、神が約束して下さった確実な「希望」が、来たる日に実現される。その希望に押し出されて、弟子たちは「悪夢のような過去の町」エルサレムに戻って来ている。これは、全く新しいことでした。

エルサレムに戻って弟子たちは、滞在していた家の二階へ行きました。そこで待っていた婦人達、イエスの母マリア、イエスの兄弟たちに加わり、一緒にイエスの言われた「天の父が約束されたもの・聖霊」を待つことになりました。約束の「聖霊」は、弟子たちが「力を受けて、地の果てに至るまで、イエスの証人となる」ためのものでしたから、「地の果てまで、イエスの証人となる」日を一緒に待っていたとも言えます。

希望に押し出され、支えられた弟子たちの「待ち方」は、「心を合わせて・熱心に祈り」ながらであったと、聖書は記します。約束のものを待ち望んでいた人たちのその「在り方」は、大変前向きで、積極的なこととして描かれています。「熱心に」には、「飽きることなく、続けて」という意味が含まれます。その原語には、「前方に向かって、固く離れず専心して、忠実に」という意味があり、ここでの「熱心に」になっています。「熱心に」という言葉の根は、「強い、確固とした」という言葉です。そこで、14節の「熱心に」は、当然、「忍耐強く」ということが含まれてるのは言うまでもありません。

新約聖書では、「熱心に」という行為が「祈り」の行為と結び付けられて理解されています。「祈る時には、熱心に祈る」。「飽きることなく、固く専心して、忍耐強く」祈ることは、イエスが教えた祈り方そのものでした。イエスは、偽善者や律法学者、また異邦人が好んでしていた見せ掛けの長い祈り、言葉数の多い祈り、人の耳や心に訴える術を心得た祈りを非難して、たとえ拙く小さな祈りであっても、「かならず耳を傾けて聞いてくださる神に信頼して」祈ることの大切さ・尊さを教えられました。その神に信頼を固く置いて離れず、「たゆまず祈ること」を教えられました。イエスが弟子達に「失望せずつねに祈るべきこと」、「気を落とさず、絶えず祈るように」と教えた話は、いみじくも使徒言行録を書いたルカによる福音書だけにある譬え話です（ルカによる福音書 11 章 1～13 節、18 章 1～8 節）。

そのイエスの教えた通り、二階に集まった弟子たち、婦人達、イエスの母と兄弟たちは「熱心に」祈りましたが、それも「心を合わせて」、「一つの心になって」祈ったことが聖書によって明らかにされています。実は、「心を合わせて、一つの心になって祈っていた」。これは、初代のキリスト教会が、どのような集まりであったのかをよく現わしています。「使徒言行録」でも、「一同は心を一つにして」という表現が何回も出てきます（2 章 1、46 節、4 章 24、32 節、5 章 12 節）。初代の教会では、神に讃美をささげる時も、共に働く時にも、「一同は皆、心を合わせて」神に向かって讃美をささげ、働いたのです。

しかしこのことは、初代教会では、そこに集まる人はみな仲良く、意見の対立も人間関係のもつれも無かったということではありません。その反対に、使徒言行録には、今日の私たちと同じように、考え方の違いや、好き嫌い、好みの違いによる対立、争いがあり、交わりの中に緊張関係があったことを記しています。例えば、初代教会では「持ち物を共有し、思いも心も一つになっていた」はずでしたが、アナニヤとサフィラという夫婦は、土地を売ったお金を誤魔化し、その一部しか分かち合いませんでした。教会の指導者であったペテロから「あなたたちが土地を売って得たお金は、本当にこれだけですか」と聞かれても、「はいそうです。」と平気で嘘をついています（5 章 1～11 節）。また、日々分配される食糧のことで、ギリシャ語をしゃべるユダヤ人とヘブライ語をしゃべるユダヤ人たちの間に、つまり異なった文化を背負っている人達の間で溝が出てきてしまい、そのために仲間内の未亡人たちが軽んじられると言う問題が起きています（6 章 1 節）。

しかし、初代教会の人たちは、それらの問題を乗り越える「術（すべ）」を知っていました。「心を合わせ、一つになって」祈り、「神を讃美する」という術（すべ）でした。天使を通して神が約束して下さったイエスの再臨と、「聖霊が降る時に、力を受けて、地の果てに至るまで、証人となる」というイエスの約束を、将来に向かって開けている、これまでとは違った全く新しい希望として、神の方から約束して下さった確実なこと、神から差し込んで来る光として、心を一つにして共に仰ぎ見、待ち望み、それに向かって一緒に祈り、神をたたえて讃美する。それを通して、直面する問題と課題を、対立と溝を、悲しみをと怒りを、傷つけ傷つけられた痛みを、そのままに身に帯びながら、そこから立ち上がり、乗り越えようとしています。

少し後の 4 章には、ペテロとヨハネが捕らえられ、牢屋に入れられ、脅され、「イエスの名によっ

て一切語ってはいけない」と強く禁止された後、釈放されて教会に戻った時、教会の人々に身に起こった事を全て報告するという箇所があります。それを聞いた「人たちは心を一つにして声を上げ」（4章24節）、そのような苦難に屈することなく、自分たちが「大胆に、御言葉を語ることが出来るようにしてください。イエスに名によって、癒しと業を行なうことができるようにしてください。」と神に祈り、求めています。

イエスは私たちに「失望せずつねに祈るべきこと」、「気を落とさず、絶えず祈るように」と教えたと言いました。教会もそのように語ってきました。しかし、「イエスの言うように『失望せず、気を落とさず、絶えず熱心に』祈ったら、どうなるのか。何が変わるのか。」これは、多くの人々の祈りに対する素朴で、正直な問いではないでしょうか。「祈ったら、願いがかなうのか。祈れば、苦しみや問題がなくなるのか。」と問うのです。そして、「神により頼んで」とか、「神に導かれて」という「教会用語」に対して、「キリスト教の人たちは、神頼みばかりして、自分で自分の人生を切りひらかないのか。」と問います。教会はこの問いを、「キリスト教を知らないから」、「聖書をよく知っていないから」として、簡単に片付けてはいけないと思います。教会に向けられた真剣で、厳しい問いです。その問いを真摯に、正面から受け止めるべきではないでしょうか。

目の前のこと、また、まだ見えてこない将来の事を、「具体的に、どうするのか」。それを、ボタンを押せば品物が出てくる自動販売機のように、祈りは作用しません。むしろ、祈りは私たちに、「何」と「どう」を選ぶかという、冷静な心を取り戻させるのではないのでしょうか。今月の聖書箇所に戻ると、「必ず、きっと来る」イエスを全く信頼する中で、自分で一步一步、足を前へ出してゆくことこそ、祈りによる「実」とは言えないのでしょうか。壁にぶつかって挫折し、望みが砕け散り、悩みと問題の痛みの前にうずくまる。これが私たちの現実です。その時に、聖書のみ言葉を思い出させ、ささやかであっても、もう一度頭を上げ、顔を前に向けて、仕切り直すことへと私たちを押し出す力こそは、祈りから組み上げられる力だと言えないでしょうか。

イエスが再び来るという確信と、聖霊が降る時に地の果てまでイエスの証人となる約束を心に刻んで、「共に心合わせて、熱心に祈る。神を讃美する」。これが、初代教会の力の泉であり、教会の命を支えたものでした。初代教会の人々にとって、「心を合わせ、心を一つ」にして、神をほめたたえることは、単なる人間の宗教心の表われ以上のことでした。その有り様は、この世に来られ、私たちと共にあり、初めから最後まで私たちを愛し、進んで十字架につく程に愛し抜いてくださった、そのイエスに対する私たちの応答に他ならなかったのです。

「待ち望む」ことは、イエスの誕生を祝うクリスマスに見落とすことのできない大切なテーマです。このクリスマスのテーマは、待ち望むことを忘れ、目に見えることで心を一杯にし、それにたやすく捕らわれてしまう私たちへのテーマでもあります。まるで「イエスの上げられた天を見上げて・立っている」ばかりで、イエスが「必ず、きっとまた、おいでになる」との天使の言葉を聞くまでは現実の世界に戻ることに無かった弟子たちのような私たちに、将来に向かって開いている希望を「待ち望む」こと、私たちの混沌に差し込んでくる確かな光としての「希望」に押し出されながら、それぞれの現実を歩く様にとの励まし、そして、主イエスの希望に向かって、心合わせて、祈りながら共に生

きてゆくことこそ、再び主にお目にかかる日を生きる私たちの、教会のあるべき姿ではないでしょうか。

IT時代の今日、子供から大人まで一様に、「待ち望む」ことも、「心を一つにする」ことは、苦痛で、難しいように思えます。「待ち望む」こと、「心を合わせる」こととは、本当は「面倒くさい」かもしれません。若い人たちの言葉を借りれば、「かったるい」とでも言えましょうか。また、「将来に希望を持つ」ことが、今日ほど現実味のない時代も近年にはなかったのではないのでしょうか。一生懸命頑張って勉強しても働いても、確実に職が得られる保証にならない。たとえ、就職できて思わぬ時に職を失うことが当たり前のこの時代、「将来」や「希望」は考えられないこの時代に生きる子供にも大人にも、「待ち望む」という言葉も、「心を合わせる」という言葉も、すでに死語であり、現実感のない「力にならない言葉」となっているかもしれません。

しかしそのような中で、教会は、初代教会のように、「必ず、また来る」と言ったイエスの約束と、「聖霊が降る時には」という希望に支えられ、そこに命を見出して生きて行くのでしょうか。「目には見えない」聖霊という形で生きておられる主イエスに心を集め、そのイエスに押し出されながら、神が約束された希望に向かって、心を合わせて前へ進むのでしょうか。今月の聖書の箇所は、私たちに厳しい問いを発しています。私たちはその問いを重く受け止め、答えを見出して行きたいと願います。

[祈り]

希望と光の神様

私たちの疑いの心をお赦してください。

怒りの心をお赦してください。

傲慢の心をお赦してください。

あなたの慈しみによって

私たちの心を低きものとし、

あなたの厳しさによって

私たちを高く引き上げてください。

十字架と復活の私たちの主、イエス・キリストの御名で祈ります

アーメン